別紙様式２

令和４年度　大学活性化経費　事業成果報告書

事業区分	(5) 地域への文化発信の拠点となる取り組み (6) その他、大学の活性化に貢献する取り組み
申請組織	文化情報学部
申請組織長	役職名　学部長・教授　　氏名　脇田　泰子
統括責任者	役職名　准教授　　氏名　宮下　十有
課題名	「アートとものづくりワークショップ」に関わる地域コミュニティーの醸成とインフォーマルラーニングの環境の構築と展開

	役割	氏名	所属・役職名	役割分担
事業組織	統括責任	宮下 十有	文化情報学部メディア情報学科・准教授	WS イベント実施・とりまとめ　映像系 WS の開発・実施
		亀井美穂子	同学部同学科・准教授	電子紙工作・デジタルファブリケーション WS の開発・実施
		向 直人	同学部文化情報学科・准教授	VR・AR の WS の開発・実施
		早瀬 光浩	同学部文化情報学科・准教授	ワークショップの開発・実施支援
		鳥居 隆司	同学部文化情報学科・教授	電子工作 WS の開発・実施
		楊　寧	同学部メディア情報学科・講師	デジタルファブリケーション WS の支援

１．事業開始の背景・経緯や目的等（200 字～300 字程度で記述）

文化情報学部の学生・教員を中心に 2014 年以降継続して実施している「あいちワークショップギャザリング」は、多様な学びの場の提供と構築を目指し、愛知県自動総合センターや近隣の大学、地元のアーティストと連携している。本事業は、その中で培かった地域コミュニティーの醸成を目的としている。

2022 年度コロナ禍に対応しながら、教員と学生、地域のプロフェッショナルと協働し、文化情報学部の教育の特色である情報技術を活かし、ワークショップの企画・開発・実施の機会を設ける。また、これまで同様地域で活動する出展者同士が交流し、インフォーマルラーニングに対応した多様な学びの場づくりに取り組む。その成果を「あいちワークショップギャザリング」の開催に反映させ、企画・開発されたワークショップの情報を提供する。学生自身による活動記録、記録メディアの充実を図る。本事業の紹介や一連の活動、リーフレット及びインターネットでの情報配信と共有を行う。

２．事業方法（特色・独創性）等（300 字程度で記述）

- 地域の社会教育施設、企業、他大学と連携し、ものづくりを軸にした多様な学びの場づくりにより、出展者・参加者の主体的な学びと地域文化の醸成の一助となる。
- 複数で多様なワークショップを展開することで、参加者の情報活用能力の育成を促す。
- 学生が教員、地域の人々とワークショップの企画・開発・実施・改善を協同で行うことで、学生の企画開発力や実行力、ファシリテーション能力を培うことにつながる。

本学部の教員が提供する情報技術を用いたワークショップは、高度情報化社会を生きる力を育む情報教育の重要なコンセプトを含むものである。

３．事業の成果（600 字～800 字程度で記述）

2022 年度も新型コロナ感染対策から、Peatix の導入による事前予約制を取り入れ「あいちワークショップギャザリング」の対面実施にこだわって事業を進めた。コロナ禍以前同様に夏休みにあたる 8 月 26・27 日「あいちワークショップギャザリング」を対面形式で開催した。その際に出展する予定のプログラムを紹介、事前交流会を実施。昨年は稼働が難しかったオンラインワークショップも、現地で文化情報学部亀井ゼミの学生と北海道教育大学函館校山口良和准教授と卒業生の参加により、実施が可能となった。一般公開日である 8 月 27 日当日は午前・午後で 280 名の参加があった。会場をメディア棟から大学会館の 1–3 階とし、各フロアで隣接するワークショップの様子が分かり、相互の関わりが増えた。一方で、エレベーターがないなど垂直方向の移動の難しさなどが問題ともなった。

学生と専門家であるチーム●▲■とのワークショップの協働事業は 8 月 3 日の愛知県児童総合センターの見学とあそびのレクチャーおよびワークショップを経て、8 月のワークショップギャザリング、9 月の令和 4 年度文化庁メディア芸術祭名古屋会場（https://nagoya2022.j-mediaarts.jp/）の出展サポートなど、専門家とともにワークショップを行い、サポートしながら学ぶ場を展開。12 月の GIFU ワークショップギャザリング vol.8（https://kenbi.pref.gifu.lg.jp/events/2022_ws_gathering/）に学生と「デジタル工作「ちっちゃいものづくり」」と「電子工作」を出展、1 日に 80 組の参加があった。12 月 3 日の Ogaki Mini Maker Faire 2022(https://makezine.jp/blog/2022/05/ommf2022.html)の見学と合わせて、県外でのものづくりとアートのワークショップの動向を捉えることができた。

2023 年 2 月 23 日「あいちワークショップギャザリング mini」では、感染対策の緩和された状況での実施が可能となり、椙山のこども園、附属小学校などのチラシ配布の協力を得て午後の実施で 200 名余りの参加があった。多くの参加者があったことで、コロナ禍以降のイベントのあり方、学びの場の作り方、学びの質の保証について、多くの課題を発見することができた。

相互のイベントへの出展・参加・見学を通してこれまでのギャザリングに関わった人々との関係性、地域コミュニティーの醸成ができた。SNS の発信、映像記録、報告書の発行なども実施できた。

４．キーワード（本事業のキーワードを１つ以上８つ以内で記載）

①ワークショップ	②コミュニティー醸成	③地域連携	④学びの環境づくり
⑤ワークショップ開発	⑥専門家・学生の協働	⑦	⑧

５．事業の達成状況及び今後の課題（事業の達成状況を踏まえて、課題、反省点、及び今後の取組みを具体的に記載すること。）

この事業において、実際のイベントに出展するメンバーは入れ替わりながらも、過去のイベント出展者を巻き込みながら、目的としている「地域コミュニティーの醸成」が達成されたと言える。インフォーマルラーニングの場として、2022 年度オンラインと現地実施の協働ワークショップへの挑戦、対面とオンラインを交えた多様な学びや学びの環境の開発について、第 29 回日本教育メディア学会研究大会（2022 年 11 月 27 日）にて、亀井らと山口（北海道教育大学）らより報告がなされた。学生の卒業研究も本事業で実施したワークショップを題材とするものもあり、学生にとっての実践の場となっていることが見て取れる。情報発信に関しては、サポート学生による記録・撮影も実施され、報告書の制作原稿もコミュニティーメンバーの原稿を活用して構成することができた。

今後の課題として、以下の 3 点があげられる。

・コロナ禍以降のイベントにおける、ワークショップでの学びの質の保証
・学生を含むコミュニティーメンバーにとってワークショップ開発の試行錯誤の場の確保
・ワークショップ実施と設営・設置するより良い場の構築

今後の取り組みとして、2023 年度は感染対策の緩和により積極的な活動と展開が期待される。活動を活発に行うことで、学生、教員をはじめ関係する人々にとって関与しやすい環境と豊かな学びの場の構築を図る。ギャザリングミニの実施により学生の試行錯誤の場を確保し、学生、教員が、それぞれの立場でギャザリングに関わることで、地域と連携した文化の醸成、コミュニティのさらなる醸成を図りたい。